

## 31 高次脳機能障害を有する患者に対する神経心理学的検査バッテリーの検討

### —記憶を中心に—

病院 医療相談開発部心理 田中大介 四ノ宮美恵子 土屋和子 尾崎聡子 乗越奈保  
色井香織 富岡純子 研究所 障害福祉研究部 嶋野麻里子

#### 1. はじめに

高次脳機能障害の一症状としての記憶障害は、患者が自立した日常生活を送る上で大きな障害となる。そのため、記憶能力のどの側面が低下しているのかを見極め、障害の認識やその対処につなげるために、当院心理では高次脳機能障害を有する患者に対して複数の記憶検査を実施している。従来、三宅式記憶力検査やベントン視覚記銘検査、あるいは記憶に関連した能力を測定している WAIS-R (ウエクスラー成人知能検査法) の下位検査 (数唱・算数) を用いて記憶障害の有無を判定してきた。それに加え、近年標準化された新しい検査で障害のいくつかの様相を比較可能な形で測定することができる WMS-R (ウエクスラー記憶検査法) や日常生活に近い場面での記憶能力を測定する RBMT (リバーミード行動記憶検査) も実施している。

そこで、本研究では現在までに実施された検査のデータを元に記憶検査間の関係を検討し、その上で WMS-R と RBMT の有効性を検討することを目的とする。

#### 2. 分析

まず、当院心理で検査を行った 172 名のデータから、記憶能力に関連する検査、すなわち、三宅式記憶力検査の有関連正答数と無関連正答数、ベントン視覚記銘検査の正答数、WAIS-R の数唱・算数の各評価点 (これらの 5 指標は以前から用いられてきた指標である。以下、旧指標とする)、WMS-R の視覚性記憶・言語性記憶・注意集中・遅延再生の各記憶指標、RBMT の標準プロフィール得点 (これらの 5 指標は近年より用い始めた指標である。以下、新指標とする) の計 10 指標に対して探索的因子分析を行った。その結果、2 因子解 (記憶一般因子、注意因子と命名した) を得、各因子は旧指標と新指標の各検査から構成されていた。

次に、新指標によって旧指標の結果を説明できるかを検討するために、新指標 5 指標を説明変数、旧指標 5 指標を基準変数として重回帰分析を行った。その結果、決定係数が .262 から .645 となり、旧指標と新指標で測られた記憶領域はある程度共通であることが示唆された。

#### 3. 考察

新指標は、旧指標が測定する記憶領域をおおよそ測定し得ることがわかった。旧指標は実施が簡便で患者への負担が少ない利点があるが、結果から障害の様相を読み取るには記憶に関する専門的知識を要する。その点、障害の様相間で比較可能な WMS-R や検査項目が日常生活場面を想定した RBMT は結果を具体的に理解することが容易である。このため新指標は病識が乏しい高次脳機能障害を有する患者に対して記憶障害の判定基準のみならず、障害の認識を促す認知指導や、家族に対して対処を指導する家族指導の場面でも活用できると考えられる。

今後、WMS-R や RBMT を実施してデータを蓄積し、さらに分析を進め、例えば日常行動がどの程度可能であるかを予測するというような、より明確な基準を得ていくことが課題になると考えられる。